

ライフスタイル、価値観の変化、そしてコロナ禍を経たことにより、以前にも増して家族葬・小さなお葬式というフレーズが定着したと思います。従来の形式から家族葬・小さなお葬式に変容していった理由も踏まえ、改めて葬儀の意義を問い直す時期を迎えているのかもしれない。そして送られる側・見送る側が共に考え、両者にとって、どのような葬儀が意義あるものなのかを相談していくことが何より大切でありましょう。その結果が家族葬・小さなお葬式でも良いですし、多くの方々に見送られるような葬儀であっても良いと思います。葬儀を見つめ直すことは、一度きりの限りある『いのち』について考え直す機会でもあるのです。話し合うことを通じて、送られる者は「有難い人生であった、それも多くのおかげに支えられていたのだ」と再確認し、また見送る者も「人生を育み、多くの方々にお世話になりました」と感謝の念を新たにして、与えられている『ただ今』を大切に過ごしていきたいものです。

江戸時代の禅僧である良寛さんが『散る桜残る桜も散る桜』という句を残しています。咲き誇っている桜、散りゆく桜をご覧になりながら『いのち』について考えてみませんか。

